太田道灌雄飛録

二

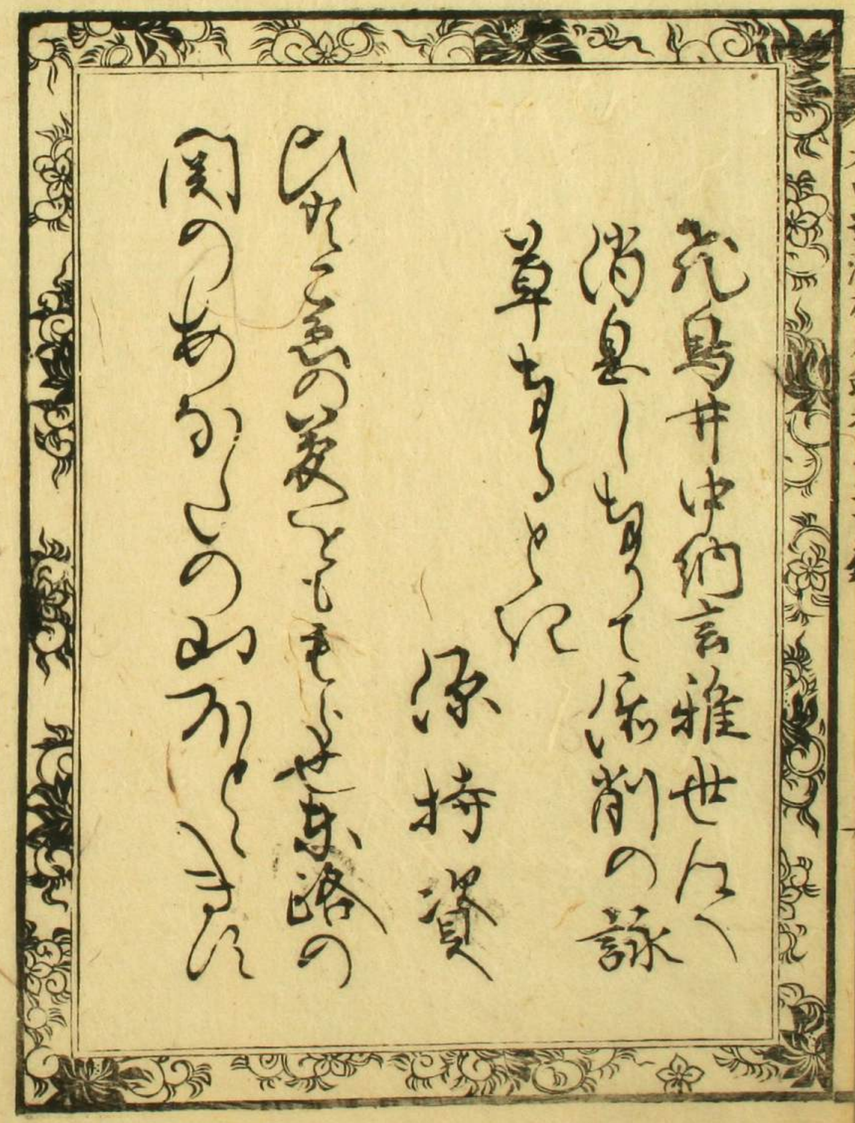
遠
2510
6-2

2510
6—2

太田道灌雄飛録巻之二

目録

一成氏管領上杉憲忠と不快の事
一成氏憲忠を殺す并に上杉入道道潮鎌倉へ寄せる事
　附太田道灌退口武勇の事
一成氏上杉と軍并に成氏と上杉より京都へ注進
　附武州府中分陣ホ軍の事
一常州小栗城成氏ヘ野國宇都宮の城を攻る事
一京都より成氏征罰として今川範忠鎌倉へ発向の事
　并に成氏鎌倉を退去軍兵ホ乱妨の事



太田道灌雄飛録巻之二

東都　木村梅年忠貞編緝

○足利成氏管領上杉憲忠と不快の事并和平の事

其頃山内の上杉右京亮憲忠若年なる家長長尾左衛門尉能景諸事
名代として政事を執行ふ。又扇ヶ谷の修理大夫持朝うしなひ子も持氏滅亡の
よりて憲實ふ一味乃弁一ありとて世中をうかがひ怒り息
彈正少弼顕房ゑ家督を附屬し憲忠幼稚にして両家の和融を計る。
其身へ出家入道して道朝と号し武州河越へ隠居しうる。然ども
顕房もいまだ若冠なりそれ家臣武蔵の紙上の右田備中守資清政
務を補佐して万端私のなりしひすくれ紀しうる。右田もと尾へより扶ふ
付て二心なくよく仕ぐ。総て安房ゑ憲実の捷乃ごとくよ。関東氏治ん

と云。世馬人そその頃東国奏双の者なるべ。其名人多都なる国人将軍家なるものの〻くはぐ〻めさとる。中よりも毛尾祐系。上杉乃嫡家上内乃物事なるべ。佐人これと業敬〻て其威有氏なる〻ぶる者もあり。毛尾ハ三流あり。上野白井と。上総佐貫と。越後〻ふあり。世ふ又成氏へ當時出頭の人〻。結城薬因小山。小田。宇都宮。佐野。千葉新介。亂将。又の流直持氏へ不忠あり〻〻。ども。同姓馬加陸奥守康胤。少動めよりて。成氏のあるり参る。上杉といろ〻よりよ婚げ威と振ひくるる。武蔵へかす〻ぶと事ふ乃ま〻ひつ〻たく作法と上杉の其間不快ゆとそうきれ。彼て後ハ公のさる作法なり。上杉と退治の事。程あるまじく古河賢清。長尾祐系相談〻て上杉方へ一味同心ス大名氏お備〻事の大ふ〻ぶる出ふ世方より退治まぐ〻て。寛德三辛未年。四月廿一日。古河賢清。毛尾祐系。

両大将〻〻。五百余騎を引率〻。縁合の作法へみ〻ふの世さる。成氏へ出ひ火急ふ告〻るる小折帰用意の兵士も少〻〻て。防戦叶ハぐさる〻ぶ。一先江の島の方へ遁る。世ふる背く陣ふる〻。見ハり戦ひ程ふ〻ん。安房上総へ〻ふ〻。人数と併〻たるんとの誅なり。毛尾古河成氏既ふ作法と落〻江の後人陣〻の〻と用〻ふ〻〻。跡と慕〻く腰弦まで〻ぞ書来り〻る。武氏の出ふ備〻る。小山下野守高朝。つぐ其敵と少ひち〻さんと。二日巳の旅とと〻めて七里ぶ濱へ馳向へ。防ぎ戦ひるぶ。敵ハ大勢味方ハ小勢ふ〻ぶる羽勇と振ひ〻ぶ〻ぶ。家の郎多八十除人付ふ〻。その者も数多負ひ〻〻ふ名。世人感ぶ〻〻退く。敵ハ多勢ふ〻たの〻て。由比の濱まぐ〻ふ。小山る羽歌を〻〻〻ぶ〻ぶ。世敵と付〻れ〻千葉新介流将。小田僕波守持家。宇都宮肥前

守秀綱四百余騎にて懸り合ふ。勝ちとりさる。太田長尾が馬まの
方より鬨の声をあげて、打ってかかる。も尾能景これを見て、始めの軍ふ
る兵ども、ふたゝび同じく切崩す。来配とりて下知すれば、早て疲れ乃
若者ども、真先に進んで火花をちらして戦ひける。佛敵方へ小山が敗軍
の恥辱を雪んと。切れども射れども物しも甚だ八方ゆとりて付て出れ
ば、も尾が備も色めきたる。殊に小山と励まし合ひ、敵方へ追ってかゝる。脇方
も亦勇気多し。終に虎口追ってかゝる。千葉小田宇都宮へとりや味方
も勝るぞ。安潟とぬるぞ。能景を付元とて。疲れ来るを取挫けば。能景
大きに怒て進き味方の者ども。これ敵へ勢をりうて大将どもち
られと。頻に叫び合ひ。人どもの。大勢の靡きたるに依て。一返しに
今ぞ。恐怖とりて二陣より。もう入る。太田資清が郎伍へ崩れる。

資清が先陣利なく入ぬと。弓矢の方へ。おゝ先を。先まの兵者る
さんぐふりて。孔を。かゝもべ。資清歯噛をして。怒れども。如何ともすべ
孔ゆ。ゆく。逃る味方ふ。とられ十町ばかり退きさる。佛敵方乃三将を
勝軍ハ。ゝども。兵士。惑ひ戦へ。疲れ物もの。ざれば。追付とる
はでもあ。孔色だって。ゆり。敵。叫ぶ。ゆ。言。ゆ。みゝびる。ゆ日の軍ま
よ。秋勢ハ百二十餘人。討死。ゝ。再。ゝ。ゝ。ゝ

ゆゑ、ゆゑ、ゆゑ、そは宥免のうへ、和平を預ひ奇ると、紙頭小條を
よこしゆゑ、成氏ゆゑ、ゆゑ、納得ゆゑ、赦免の旨仰出されると。諸人
大きに喜び、編笠を脱ぎ、手を摺り、成氏と、京都人数の
須賀谷の表状如左

関東執務事上杉右京亮憲忠雖居其職、依為微若長
尾景仲門尉自寄諸職、令蔑如公務、太田備中守為代官、張本
緩怠、逐日令傍輩、川越構構、造意深、及火急、攻撃千葉恩
去月廿日、後居城、上総国羽生城一日為長尾右田左張本、寄来腰越浦、対合戦之間、小山下野守家人数輩、令討死、其
後彼等生田比浦、知行千葉新次、小田孫次郎守宇都宮二下、為
法方数輩、攻戦間、山徒等、彼方数輩、糟谷先に引退、対合戦、

行、長棟、食事、道、晩、為、長、異、計、器、自、駿、及、羅、城、執、中、陣、系、行、仕
候間、以、寛宥之儀、令、復免、旨、中、付、如、条、上、令、雑、沼、結、句、士、沢、山、仁
構、要害、之、由、其、聞、於、次、仁、於、長尾右田、以下之、山、徒、人、衆、仁、令、組、置、村
由、之、義、歌、也、一、件、事、不、容、時、日、雖、下、之、須、賀、谷、捕、国、る
彼、合、言、上、仁、令、延、引、

一 右京亮事、自元、無、異、間、不、自由、被、元、不、便、之、至、
宥、憲、忠、彼、官、人、中、長尾、名字、数、輩、羽、生、小、幡、小、宮、山、之、下、数、十、人
地、名、当、陣、

一 安房、上、道、後、関、東、二、後、行、改、勢、之、由、可、被、仰、下、於

一 右、京、亮、一、日、合、戦、時、戦、功、之、輩、中、仁、成、下、所、感、之、所、教、書、

一 関東、諸、侍、兵、武、器、上、京、一、揆、輩、中、仁、殺、害、命、被、以、下、教、書、

尤可然者

一奉對京都一切不存私曲自今以後為天下抽無二忠勤肝要

安房への道線雖若儲い早速可相宿彼下上裁い為二畏入い雖

趣可然樣一途被露絵忘く後之

文月十二日　　成氏

左馬門督への道度

かくて京都より御教書とあり。不さまてふうて。双方和平調い〜べ。

同ごき八月成氏ゆも孫令へ出国ありける。

○成氏上杉憲忠を殺害所り上杉持朝孫令へ書まる大面道真

退口武勇の事

さまたへ将軍家の仰わ知〜て。今度成氏へ不義の輩出優免もり。憲忠

ゆも和平ありなんとう。就西堂蔵王院のあ僧ゆ使〜て下旬の間

成氏より一色宮内大輔直武田右馬助信長とさ〜よせるふゆ多ふ。

憲忠も長尾景仲ゆ先を勢り出ゆ遂げ。沛方沛馬と獻よとこれうり

長尾景仲ゆも出仕遂げ。沛方沛馬と獻よとこれうり

ゆへの道〜て。能景ゆ留賢。資清の道真〜ぞ号〜る。かく〜べ憲実

入道も孫令へ出家ゆ孫令へ出家ゆ孫令へ出家ゆ孫令へ出家ゆ孫令へ出家ゆ

仕使ありそれども。終よ孫令へ出家ゆ孫令へ出家ゆ孫令へ出家ゆ

陽色ゆ〜り〜るが。後ゆ上杉方と国通〜て西国の方へ行脚〜。志ゆ

関防国深川の大寧寺ゆ〜く遷化〜ぞ。道脱い姫ゆよ秋三郎重

方と云ひ〜るが中年より道出〜て。硯屋和尚ゆ弟子〜る。生涯佛門の徒と

あり。ある世よ聞えて道人なり。もとるふしの鴻乃合戦のごとし。成氏へも敵とするゝ一味のものども数人本領を没収せらるゝ。和後寛免乃後ハ領地に返し下さるべき旨仰。憲忠より頻よ新組しきれども。成氏曽て弟新あるゝ。兄よりも皆〻分国の一揆。彼官人等仰せ集め牧仗数新よおのゝ〻ぶらくども。成氏更よ安へのゝ事あり。さるありて後者ども。奇怪ありゝの庄園をも抑へて。家人等ふ恩補をもあり。国〻より公止む事なく。騒動怠劇日仰追く奔り。何さまよ大乱の端とゝえられべ。成氏より憲忠ふ命ずゝる。折柴をかくらゝとゝのゝども兄ゝ弟ゝ。かゝるゝべ。東国の大事日あゝぶとゝして生事ゝんと。おのく安さてゝろもあゝりそう。爰ふ憲忠の智。扇が谷の修理へ乃道朝へ。清世の中を考へるふ。憲實ふ持氏乃仇亡しゝるる事へ。憲〻人ゝよあゝ。その内ゝよ成氏恨ゝあゝでやゝあゝぶ。弼ふ結婚を仰せ始め。これ乃ふ憤を懐く時なれべ。憲忠ふ身の上誠ゝゝく。深潮小隙むの患あゝ。ともかくゝても婚姻君臣合体の期あゝべゝ。一家の滅亡仰ゝふよゝんへなゝ。ともゝ尾へ道昌貴ゝ和ゝ。今世。安ゝよ鄙へ下ゝ一味の族を併へゝく。種ゝ計略をぞめぐし乃。日比沸騰方。爰仰ゝ二ゝよ分き。不快ゝあゝくゝゝゆゝ。沸騰方社ゝ仰事と聞ゝくゝひゝゝ。弟沸騰方地集ゝ。上杉長尾景ふ隠棲ゝ発ゝ。弟景ゝ。少時も油断よみよゝく味方の一大事ゝゝべゝ。憲ゝ憲忠ゝ退治ゝ関東ゝ結むべゝ。成氏へ勧めもゝべ。沸騰ふも兼ゝより思ゝゝえゝとゝゝゝれべ。成の義ゝゝゝく芸源義あゝ。在鎌倉の人ゝ成氏乃ゝ。一番ふ結城中務大輔成朝武田右馬助信長印東式部少輔等。二百騎ゝ思び寄ふ用ゝゝゝ。芸乃ゝ仰

前の笠頭上杉安房守憲安
入道長棟舎弟同三郎重方
入道道悦を伴ひ伊豆ゝ
國清寺迄て中宮へ赴く図

[illegible]。享徳三年甲戌十二月廿七日の歳暮の夜。上杉が宿所塩谷西御門の館へ[illegible]の声とゝ[illegible]。憲忠へ敵の来たるとひしめ[illegible]。織の事ゆへ[illegible]。乃軍勢等。左右なく[illegible]へ入る。右京亮憲忠。[illegible]。故大懸へ道灌秀が息所[illegible]憲秋[illegible]廿二人今へ道[illegible]。潔く[illegible]切先をそろへて[illegible]。巻き[illegible]。憲忠も生死[illegible]。数多[illegible]。自害せんとする[illegible]。矢一つ来りて[illegible]甲をそ[illegible]。急所の痛[illegible]眼くゝんで[illegible]。[illegible]を見るよう結城が[illegible]。[illegible]。憲忠が[illegible]。

按ずるに金子氏家は。其の祖武蔵国。村山党人金子十郎平家忠が二男[illegible]。政朝女あり。[illegible]。[illegible]。[illegible]

相滅ろう。成氏幷時氏家ふ三ッの褒ふ紙賜ろう。寸尺実検の三方血よ
流ふて。孔を断ふる如くふたえうもとび。凡のふふ一文字を家の紋よきあ。
二ッゆへ関左の舎合を作ふる。三ッゆへ常陸国真壁郷三千二ろ紙ろる。
氏家ふまこころ因出下妻ふ城を築ふて世所よ作ふ〜各ふを安賀谷く
ゆ〜ふる。あ又因出八日出清所勢憲忠が山内の紋を追捕を所出遣く
上列へ逆進ありふとび。扇朔へ道方ふ怒りて。也尾へ道昌興。方面へ道道
真。その外一味の軍をおりふり。一千餘人鴻沼ふよ寄せ来り。後陣の
勢を落ふ。ふてゆ又成氏の出合弁勝長寿院の成潤へ出逢ふのふく
ゆとび清所方ろ一人ゆて出ふ〜ぶ。敵ふりのく驕〜ふ〜也ん。什強動の
紛ふふ操舎紙道を出て。憲ふゆ野の日光山へおちゆき。敵と一味の色
とゆ〜ふ〜。一山の衆徒ふて備ふられふる。新て成氏出へ。ふ扶ぶ再数〜紙

憤ふ代ふへ垂二の合戦ふ〜。上扶の者ども悪くゆ亡し。根紙動く
事紙拾さんと。武田右馬助信也。一色宮内ふ補能出紙大将ふて操舎紙
ふふち。敵陣へ出ふる。上扶方ゆへ清所方ゆ勢ふれでかゆ〜よ来
ろ〜〜ふ〜ひもふ〜ぶ。油ひ〜ふてゆろふ用ふ強ふ。長の王の強動
紙ま〜〜ぶ上を下へとかく〜ふる。武田一色ふれを見ふ。自ふ先ふ進ふて
切ふへる。大将ふの如くうもとび。備軍一同ふ勇ふすみ。猛猛ふる敵紙
鑓の鞭ゆく強ちし。或ふ方ゆて切ふ〜ふ。元ふ紙ふ不ふる上扶
勢動ゆ退ふられ。級軍の色紙ゆ〜ふ也。清所方へ西もふ〜ぶ。左ふ
ひふれて責ふる。也尾方面も出へ矢猛ゆふ也ども。軍ふる我へ競ひも
ふり。深ふふふふふふ〜ふ。先ふより嚴ふかふ。懲敗軍ふふし
ふび。民間 色ふ率を指揮ふて。退付する事歳〜ふるとび。持朝へ道

ゐも危きこと度々なり。大田入道真仲より人を遣し、今は偽あく引
く時なり。分方の者ども。猿ア[illegible]ふく付まゐん。某世ゐゐあく射出し、敵の命
ゐ代らん〻。只一人ゑゑく返さる。太田ぶその日の出立に紺糸威の鎧よ同じ
毛乃ゐ投鏡の書大天衝八幡宮と精霊ゐ幕を。其の孫の次
郎ゐ[illegible]れるよ。金貝ゐく渕先千鳥を拵る鞍置く。熊毛うたりの厚総付
鞦ゐけてゐ〻まとゐ幕の。白柄の大もゐゐ鎧の蛭巻〻るを。茎鎧ゐ引
そどゐ。勝よ幕くる市所勢の足並を乱〻て出ひ来るよゐ中へゐ手ゐよ
弛せ入り幕ゐゐ〻ゐ後よ踏れ。四方八面よゐうて薙ゐる。太田ゐ鎧
ゐこれ〻ゐんと。一まの人数二百余人を以て付て行ゐ。ゐ一図ゐ
ゐてく〻。曳く声と揚て切て入る。芸鉾先突く〻〻。市所勢乃
向よ二三十人。多ゐ討ゐ。太田を打も勇を振ひ。乃八畳沙門乃荒

ゐ〻く秘術を尽〻て。ゐ市所方も色めきたてゐ。
ゐゐる。武田信也。一色よ向ひ味方の若者敵の逃るゐみり〻ゐ。
追留の場を辛〻ざるゐ。太田の道よ返さまゐ。ゐ乃ゐよ板毛尾
再部伍と太〻〻やう返さび。今まで勝軍ハ徒事とゐりぬべし。
勢を引揚けく。入るの労を休めんハいと云ひ。ゐれば。花毛も色と
同ゐ〻て揚貝を吹ゐる。太田道灌も敵長ひ止ゐ。とゐとくゐれば。自ゐ
ゐよ引き下まく。先まゐ〻ゐ〻ゐ〻ゐ。ゐ〻ゐ〻ゐ。ゐ板毛尾ハ
落ゐく勢よ引ゐ〻ゐ。上ゐ板毛で引ゐ〻ゐ。白井の城ゐ入ゐる。
道ゐ入道も中勢ゐくゐりきれば。是ゐりあゐゐ。ゐれ〻て武州河
誠へ向ゐゐ〻ゐ。

○長尾入道再勢ゐ集む弟市所方上板方武州分配河系ゐて

合戦の事

かくて也尾入道、出陣めされん。作所方と付る事新るべしと云ひ、
さて、武後の守護職、上杉房顕、大将として、武後、信濃、武蔵、上野
その外、東八ヶ國の内より、杉本義の撰の人々、より、八幡、蒔朝、同、廳、鼻和
左京亮、同、右京亮、憲明、等、其外、下野、出羽、天命、呂、朱、上、揃、りて、成氏退
治、れ、射、代めさし、ゝゝみ。又、故犬、無入道、息、右馬助、憲、秋、又、逆、人の
ゝ、より、系、して、其、事、より、國、ゝ、ざ、り、し、ゆ、る、ば、ち、乱、と、殺、され、今、度、一、族、の
僧、ゝ、ゆ、ゝ、加、り、ゝ、り。成氏、是、を、聞、て、敵の要害、氏、綱、つ、ぐ、ら、せ、ふ、ら、も
敵、ゝ、と、て、自、然、手、て、れ、ま、せ、と、四方、を、ま、き、ゝ、の、こ、ま、て、遠、路
ま、ま、ゝ、き、れ、ば、粮、道、と、絶、切、ゝ、と、て、武後、より、ま、の、芸、き、る、一、戦、の、励、も、ま、く
思、び、く、ふ、義、ゝ、ゝ、ば、也、尾、も、沈、堀、叶、ひ、ゝ、ゝ。氏、義、より、野、の、一、揆、ま、ま

駆り、ゝ、ゝ、武州、境、原、退、て、陣、を、ゝ、る。か、ゝ、ま、ゝ、ば、成氏、も、下、総、國
菅、師、那、古、河、の、鳴、の、巣、と、り、て、不、ま、屋、敷、を、立、国、関、宿、の、堀、ま、た、築、田
河、内、ま、氏、義、め、野、田、の、城、ま、野、田、右、馬、助、ま、給、の、率、を、添、く、義、め、を、き、狩
武、義、甲、斐、ま、捕、ま、ま、総、下、総、の、味、方、を、集、め、近、日、境、原、へ、義、向、し、上、杉、も
尾、ま、氏、討、亡、し、東、國、氏、平、治、ま、ん、と、共、諸、級、る、ゝ、り。世、ま、又、下、総、の、千、葉
介、胤、直、入、道、常、瑞、ハ、日、比、谷、会、の、侍、所、ま、く。成氏、へ、度、く、の、忠、節、あ、り、る、ゝ。氏
兄、弟、ハ、故、彦、秀、が、外、孫、ま、り。今、度、彼、が、息、憲、秋、下、向、ゝ、ま、ま、元、ま、れ、ば、毎
方、の、叔、父、と、一、ま、ゝ、て、忽、ま、ま、杉、と、合、体、ゝ、成、氏、の、敵、ま、ま、ま

らゝ誘へよ。扨憲忠事、不義逆心の間、投あく征罰を加つる處なり。
急ぎ〳〵射し奉り、毛頭不義なくば、すゝて京都の御願ゝ申のべて、
一所も綺ひなくば、野辺足利の庄へ御苟字の地あゝ出る。伊代官代
下さるべし。内〳〵被仰付るべきの旨、再三申遣すれども、京都へ撰使も
なし。又関東の撰挙厳密の由沙汰あるべきの旨、唯成氏が私乃
宿忠を以憲忠を討ち、殊よりこれも得ざるして、東国の大乱と為を乗
不義の至りなり〳〵。御勘乱の出来ども出されざ。西堂も
慧〳〵千向〳〵なり。此上は早く成氏を退治して国事を結むべきの
事なり。成氏今へせんなきなり。さらば敵うへ者に追伐せらるべし。享徳
四年正月五日千餘騎の軍勢を率し、武州府中へ参向
鄙女子 小津を分る。是を聞て扨方右馬助憲秋、扨代大勢〳〵

二千余騎。同月廿一日、是も同所府中の分倍河の原へ参る。成氏へ八百余
騎を二陣に強し。同月廿二日、扨方右馬助憲秋、虎鞭よりて旗のもとへ下し。上
杉の先陣へ西もふくもと切〳〵入る。扨方右馬助憲秋、紙後
信濃乃守の軍勢を敵と小勢〳〵海〳〵に成へ。
なってと〳〵〳〵〳〵。暫時の間たゝかひ。扨方へ物別れ
なれば。敵を追ふ。扨方右馬助憲秋、散りて。我〳〵なるとも引つゝ責
うもべ。で一戦不捨りうて。始の旗のもと一所よりと逃散
べ。彼よ勢なる塚金勢。行くまでもと退かゝる。大将右馬助憲秋、味方
を制して踏止りく。是ひ勢なるとて、追〳〵合なる者もなく。右往
左往よ逃去る。憲秋も是一騎駆よ数ケ所負傷ぬ。今八乃方秋を
これば。味方の陣へ入る事あるべ。高旗寺小弛へて生害をすゝりる。

ゆる旅寺へ多摩郡得順の人あり。大宝已来の草創にして坂東三不動の一なり。孫念
寺経金剛寺と称す。相模三不動は相模大山寺・下総の成田新勝寺なり。
方々も軍を入れ給へ。石塔一色と始めて。家綱の者百人ばかり
討死せしめ。戦ひ勇ましく分倍河原に陣をとる。明日は廿二日乃早天に
上杉方より羽柴修理亮明利。大石源左衛門憲義。荒木の兵五百余騎。分
倍河原へ打ち寄せく。関の声ときを揚げりける。市野方へ昨日の軍に手
負て雪丸漂然ときるるものどもなれば。敵会寄るとらくども少しも猶
ど。拾すべく鯨波の声を合て徐々と近付き。さんざんに入り乱れ
みく戦ひて退くれ三丁ばかり引退く。市野方へ勇み進み。見る人
て出て上杉の本陣へ責めんと。里見治部少輔。淡路守修理亮法師軍戦
指揮して追付き。実に大石源左衛門の昨日の残軍を世にも見揚く
ばかり乱れ合ひ。今日の一戦乃一時方退くに付乃為なれば。見渡の中より

積兵の射手と三十人ばかり勝手出し。一むら〳〵小藪の陰に埋伏
させて居たりける。かくとも知らず小勢の縁会勢。敵を散らすよ扶ぶ軍を
彼の處までもと追て行。大石憲義は或は退き。或は退き。味方のものと
引き出せる。さまでも市野方たりとも退いて来りて。よ扶ぶ旗えを見わ
うけ潮の湧くごとく進み来る大石ば見渡ども取物をとるよりも。
時ぶつと一同にかけ出。矢倉早に射出し〳〵。まつ先に進んだる市
野方の兵五十四人ばかり射倒さる。中にも淡路守のおれは見ども
源へ出て。今へこれまでも。猛り勢よ進めと。采配振りて下知
されば。見と大勢とうんとうりあるとなれば大石の見渡ども四の如くに敗つ矢に。
淡路守が猛勢身通すべ。人の戦ひあまされて出る逆さまに成てぞ見
きまりける。里見治部少輔これ紙えて。當の敵を討ちんとるの暴を

引向けふとろふ。矢一ツ来りて射向の袖より脇垂へ筈深くとゝまる射
込とき。急ぎすれべたちまちよろふ伏ふりて死しぬる。上杉の二陣
のものども。先を争ふ。敵ぶるとも殺すすめて。味方乃後
陣に続く。後陣小山武田村上等入交りて多くの敵の集り勢一度ふ
親く殺ぬれ。二陣も負て悪敵をとりひろふ。扇が谷より上杉
房朝の後陣より下てまた引るが。味方どもあて守逆さんと頻よ下知
あきとつどもよろくく兵士猛しうちんとぶきとの一人もなく。我先
あと落ぬ。まるまる。房朝の人の者も多く討死し。自分も敗北の所を
ゝれべ働も多ゝ。此度あて戦ひ死を人数の為に対きんも遠倉ゝ。
夜襲とゝくるあとおちひき。此和ゝ生害し者年二十一歳なり。ゝゝ
盛の婚めなる。其功廉ゝ〳〵黄泉の冥ゝなりなん。あととゝ生と

形り。扨所方八月日の合戦ようち勝られべ。降参の者数をもゝ。不日ゝ
敵とすゝ亡し。東国武士ゝ将軍ともふ恐びあへり。

○常陸小栗落城兵成氏宇都宮の城を攻る事

かゝとゝ扇長尾八敵軍の兵武あるゝ。常陸の国小栗の城よりあてゝ。
関東一国日月成氏追参ありゝ。先徒歩より馬をうてゝ。書国の小田。
筑田。筑波。下野の小山下野の宇都宮氏ゝ向けらも彼城を攻らるゝ。上杉方
ゝも。之合ひゝく数日合戦止むゝ。陣中より寄手一方の大将。小田中
教を捕知人病死と。見ありて。其ゝ傷ゝ守時家。穏傷ゝ。軍ゝ
て。安ゝ。ゝゝ引返。此ゝ。成氏ゝ。ゝ。ゝて荒ゝ入。大将
ゝ攻ゝ。小屋の城ゝ攻ゝ。上杉方ゝ。ゝ。ゝ
下野へ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

下総の千葉の流亡入道常陽。同時に中務の道了が。下野の宇都宮下野
守等綱。山川の新少輔。真壁の新左衛門尉等。よりて秋の味方とあるべき所に
城郭をかまへ。ちからをつくす。中にも宇都宮は。惣領の法。小栗十郎が逆
意日〻時一味同心〻〻。城の屋敷付きとる。右馬頭持綱がよりあひ。その
僧四家なり〻〻。家の臭〻て。彼行の家人屋敷をうばひ。十九家あり。
市兎と家り。市願と安堵〻〻。父が恨〻紙おりひ出るあり。今度も
最家と敵とあて。能城と。氏も他の敵とはし。自宇都宮よりとり。
城の四方を取囲〻。人も餘をすぐ〻。考く攻をふせ。城中の兵糧
乏〻〻。防禦の術尽きひろ。ちりて等綱が羽翼の臣。芳賀伊賀
紀清右堂の三とに率〻〻。宇都宮が惣領弥三郎明綱へ。山内改が
城あくあり〻〻。これとうの〻宇都宮の家代絶さんとす。成氏へ陳糸

さるとも。等綱も息男明綱。あくびよ芳賀以下の者ども。市郎方へ陳る
〻〻。防ぐ。便りく出て入道〻て。まの徒よりとるを。奥列白川の
方へ。落ぬ。ちかく〻〻。山川さ藤の方様も攻ちかとをぐ〻られも
市郎方へ津まる。

○成氏征伐〻〻。今川範忠縁金人賀向。長〻成氏縁金退去附上
軍名号九坊の事

享徳四年乙未。古九将軍義政。成氏征伐の事。参聞あり。
すあるち當今後花園院。綿の市雑と賜る。市製あり市宸輪あり。

らくあ多ふ流中雲のけくのてあ。あるまのちり紙さらく秋風

外ふ能虎を画きる市旗二なあり。将軍家とも市旗の旗よ市教書紙
まるの人。摩耶院とおそ人ふ下る。惣大将い發遠国州のさ守。今川よ上総妙

成氏征伐として今川上総介
範忠鎌倉へ発向軍兵水
乱妨の図

太田道灌雄飛録巻之三

能忠さう。東海道の軍勢を引率して鎌倉へ發向す。是ら先成氏の
古河より鎌倉へ歸ぬ。彼ら〳〵を聞きて今は是非なき事ども
なりとて。太戸内匠助。大森出羽守。印東次郎左衛門尉。里見民部少輔等
千餘人を引具して離山まで押出す。寄せ合せる敵を待ちかけて。彼ら
を破りしかば。次氏方へ新田の勢二百餘
騎をぞ向けられける。此道をぞ落ちける。世谷とりつめたりける。
南一揆のともがら蜂起して。旗挙げ城中勢を補。築
田治部少輔をぞ大将として。自ら先よりすすみ出でて
道を開きて通りぬ。公氏の方へ武蔵菅蒲へ落ちぬ。紀軍の
五十騎をあつえ。まより下総国下河辺の庄古河の城へぞ籠られける。

して古河の御所とぞ申ける。さるほどに今川が会津へ下り給ひぬ。鎌倉に
あらざるべき。なほ孔子の御所をぞ定めける。谷七郷の屋敷を民屋とぞ孔城。
うつしの神社仏閣をも追補してとりぐるを焼きしひろる。抑鎌倉は右幕府
下頼朝卿草創の地なりしかばその後北條九代の繁昌も高時の道に立ち
ぬるも。源氏なりし今成氏よりなり。古代相続の対賓此時皆長ぬる羅
まして弱る事なく。永く亡ぼしとなり。永く田圃草野と変じぬる。ことわりなる
日なれ。享徳四年乙亥六月十六日の事なりけり。ひとえに今ふたたび打老牧童
の。古塚をまぐるなる人を迎へて。懐旧の情を述べる種とぞなりにける。此孔子
鎌倉の公氏の中より。なりなる時の。のちの世の水ぐるん荘厳天神の社壇を破る。多
躰なくも神躰を奪ひとり。鎌倉に持ち巳ぶ国の忌場とせんとせり。
神あらぬもかなりぬ。その後神躰をぞ荘厳へ帰荘まりく

てゝ再りやゝの霊社と仰ぎ奉るひとゝなり。

太田道灌雄飛録巻之二終